

小山実稚恵のピアノシリーズ(全6回)

# ベートーヴェン、そして…

最初のクライマックス、第2回演奏会

プログラムは「ハンマークラヴィーア」ほか



大阪新音創立70周年記念コンサート

## ●プログラム

モーツァルト：デュポールの主題による変奏曲 K.573

モーツァルト：ピアノ・ソナタ第13番 K333

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第29番 変ロ長調  
作品106 「ハンマークラヴィーア」

## サブタイトルに《決意表明》

ベートーヴェンのピアノ・ソナタの後期5曲(第28～32番)を軸に、バッハ・モーツァルト・シューベルトのピアノ曲も組み合わせ、それぞれの演奏家の「生きざま」を表現することをテーマにした小山実稚恵のピアノシリーズ「ベートーヴェン、そして…」。第2回はモーツァルトとの取り合わせです。

とくに今回のプログラムでは、ピアノ・ソナタの最高峰、全ベートーヴェン作品においても最高傑作の一つとまでいわれる第29番「ハンマー

クラヴィーア」が演奏されます。雄大で起伏に富み、激情もほとぼしります。そして長大です。

ゆえに、「ハンマークラヴィーア」は、当時のピアノの性能では演奏するのがとても難しい曲でした(今も「難曲」に変わりありませんが…)。しかし、小山さんは「できること」ではなく「やりたいこと」に決然と挑むのがベートーヴェン。「ハンマークラヴィーア」はピアノという楽器を含めた音楽会全体に向けた勇気と決意のメッセージ」と言い切ります。

それが、小山さんがサブタイトルを「決意表明」とした理由でもあります。

'19/ 11月24日(日)14:00 いずみホール S 5000円・A 4500円(全席指定)

\*今年11月24日、大阪新音は創立70年を迎えます。

(2019/09/20 発行)



小山実稚恵 「ベートーヴェン、そして…」シリーズ公演だより

大阪新音  
☎ 06-6926-4888

# 「やりたらしいと」「を追求したベートーヴェン

小山実稚恵さんの大ファンの春子と、西欧音楽の歴史に関心をもち、秋子の、大阪の女子学生2人が、まだまだ話しています。(第2回)

## オーケストラ曲並みの雄大さ

春子 6月の、小山さんのピアノシリーズ第1回、めちゃ良かったワ。あんだ、何で聴きに来んかったんよー！  
秋子 こめん。いろいろあって…

春子 ベートーヴェンのソナタ第28番も勿論良かったけど、一緒に弾き合ったシューベルトが歌心にあふれて



いて、すっごく美しかった。この次は絶対よー！なにしろ「ハンマークラヴィーア」なんやから。

秋子 ホンマやー！「ハンマークラヴィーア」というたら、批評家やピアニストからこれまで「ピアノリスト泣かせ」>「真に近寄りがたい作品」>「ソナタの怪物」>「あまりに力強い自己主張」>「音楽史上、いかなる作品をも凌駕し、寄せ付けない」>「弾くのに莫大な努力を要する」>「つかみどころない、盛りだくさん」なんて、さざざん言われている曲やもんね。

春子 ドヤ顔せんとき。要するに、弾くのがチョー難しいってことやね。  
秋子 「ハンマークラヴィーア」はピアノ・ソナタやけど、オーケストラ曲並みの雄大な曲想の作品で、構想実現のためベートーヴェンはあらゆる技巧を駆使したんよ。第4楽章なんか、

ハッハ顔負けの「フーガ」が展開される。その結果、演奏もチョー難しくならざるをえなかったと私は理解してる。なにしろ当のベートーヴェンでさえ、「弾きこなすのに50年はかかるだろ」と言っただけやしもんね。32曲あるピアノ・ソナタで、メトロノームによる速度記号を残した唯一の曲やけど。第1楽章は、2分音符138とあって。その指示通りに弾いたらものすごく速い。そのくせ、変奏あり転調ありと盛りだくさん。個々の部分を着実に演奏するのは至難の業といわれている。ベートーヴェンは、ピアノリストを困らせるために書いたんとは違っと思っけん…

春子 聞いてて、しんどなってきた。私は小山さんの大ファンやけど、クラシック音楽には初心者やねんから、もっと分かりやすく言ってよ。  
秋子 リストは、知ってる？

春子 「指が6本あるのか」とまで言われた「ピアノの魔術師」やろ？ベートーヴェンが会って超絶技巧を讀えたとか、コンサートでは女性ファンが多数失神するほどの人気を博したとか言われている、伝説のピアニストにして作曲家の…

秋子 そのリストが、ベートーヴェンの作曲後20数年で見事にこの曲を弾きこなしたらしいんよ。演奏後、「信じがたい速さで、どんな小さな音符も弾き損じなかった」と驚きと称賛の声があがった。技巧派のリストにして、初めて出来たわけ。しかし、20世紀

に入ってからでも「ベートーヴェンのメトロノーム記号の指示は間違っている」と騒いだ大物ピアニストがいたといつから、やっぱり永遠の難曲よ。春子 ベートーヴェンはピアノが進化する時代に生き、ピアニストの改良にやたら敏感やったと聞いたけど…

## 「決意表明」とは？

秋子 例えばこんな話があるんよ。「ハンマークラヴィーア」の第1〜3楽章はストライヒャーというピアノ職人が改良した高音部を出せるピアノ、第4楽章はプロードウッドというピアノ職人が改良した低音部を出せ



るピアノ、この2台を使って作曲したといわれている。つまり、ベートーヴェンの作曲当時は、演奏するにも2台のピアノが必要だったということになる。春子 何で、そんなこと？

秋子 ピアノはさらに進化する、将来1台のピアノで必ずこの曲が弾ける、とベートーヴェンは考えたんやろね。春子 すごい！並みのソナタとはちやうど。そういうたら小山さんも「ベートーヴェンは出来たこと」ではなく、「やりたらしいこと」を作品にした。その姿勢に勇気や決意を感じます」と、演奏会に向けて語ってはる。それで、第2回のタイトルを「決意表明」にしたということやけど、納得！あなたも絶対聴きに行かなあかんて。

## ● 第2回 の聴きどころ (小山さんの話)

第2回の聴きどころについて小山さんは「ピアノ史上に残る超大曲、ベートーヴェンのハンマークラヴィーアにどんな曲を組み合わせようかと考えた時、モーツァルトの作品しか思い浮かびませんでした。全く個性も特徴も違う2人の天才同士の作品。調性関係や曲目バランスにこだわってのプログラミングです。モーツァルトからベートーヴェンへのプログラム全体の流れを感じていただければ嬉しいです」と話しています。

秋子 小山さんの意気込みが伝わってくるね。

春子 小山さんは、第2回のプログラムについて、大曲「ハンマークラヴィーア」に組み合わせるのにはモーツァルトしかないとも言っただけ。

秋子 ベートーヴェンは一七八七年四月、ウィーンへ旅行したとき、モーツァルトに会いに行ったそうや、ベートーヴェンの伝記では「会えたくけれど、外出中で会えなかった」という別の説もある。へえええ、方によると、モーツァルトが与えた主題を即興演奏したら、モーツァルトはその場にいる人に「諸君、彼を見守り給え。彼はきつと世間の話題となるだろう」と称賛したと。真実は不明やけど。

春子 ところで、プログラムにある、モーツァルトの「デュポールの主題による…」の、デュポールって人の名前？

秋子 プロイセン宮廷楽隊の音楽監督でチェロ奏者のジャン・ピエール・デュポールのこと。そういえば、弟のジャン・ルイも腕利きのチェロ奏者として有名やったそうよ。ベートーヴェンにチェロ・ソナタが5曲あるでしょ。その1、2番の初演者はジャン・ルイ・デュポールとなってたわよ。  
春子 突然やけど、あなた、猫飼ってるやろ。

秋子 それが、小山さんの「コンサートと何か関係が？

春子 小山さん、大の猫好きやて。飼ってる猫はマズルカのような小品が好きで、弾くと、うっとりしてるそうや。曲の終わりが分かるらしくて、終わりに「ニャン」と鳴くって。

秋子 にゃんとすこい！さすがピアニストの飼猫はちゃうなあ。

春子 これまでに飼った猫の中には、ベートーヴェンの32のソナタが好きで、バルトークの協奏曲とか現代曲の好きな猫もいたらしい。これは小山さんから直接聞いた話なんよ。



## ● 小山実稚恵さんのプロフィール

人気・実力ともに日本を代表するピアニスト。チャイコフスキー国際コンクール、ショパン国際ピアノコンクールの2大コンクールに入賞以来、今日までコンチェルト、リサイタル、室内楽と、常に第一線で活躍を続けている。

2006年から17年まで、12年間・24回にわたる壮大なシリーズ「ピアノ・ロマンの旅」(いずみホールほか各地でも開催)は、その演奏と企画性において高い評価を受けた。

これまでに国内の主要オーケストラはもとより、チャイコフスキー・シンフォニー・オーケストラ、ベルリン交響楽団、ロイヤル・フィル、BBC交響楽団、ワルシャワ・フィル、モンテリオール交響楽団など世界の著名オーケストラ、国際的指揮者と数多く共演している。協奏曲のレパートリーは60曲を超える。

## ベートーヴェン、そして……衿子さん

クララ モーツァルトのソナタK.333 [第13番] というと、岸田衿子さんのエッセイ の一節を思い出すわ。「……幼馴染で詩を書き始めたS……、彼は……よく手紙をくれて、『今日はこんなふう



ています』とか、……と書いてきた。」

ホロヴィ 素敵だね。K.333 な感じの一日かあ。

クララ 「……『山から帰る日の朝、ラジオから K581 [モーツァルトのクラリネット五重奏曲] が聞こえていた。その日からずっと、僕の中で鳴り続けているテーマだ』」

ホロヴィ あるある。その日のテーマ音楽って。モーツァルトがずっと頭の中で奏でられている。わかるなあ。

クララ 「……以前は『僕の恋人は自転車、つぎはベートーヴェン』と云っていた筈なのに」

ホロヴィ あはは。それも、あるあるだね。熱に浮かされたようにベートーヴェンに夢中になる。でも、ふっとモーツァルトがそよ風のようにふくと、もう頭の中はすっかりモーツァルトのメロディに上書きされているんだ(笑)。

クララ ベートーヴェンとモーツァルトを、行ったり来たりするのよね。

ホロヴィ 心ひかれて自然に意識が行き来するということは、ベートーヴェンとモーツァルトって、全く違うタイプの音楽世界なんだけど、やっぱりつながっているのかな。

クララ そうね。どちらも「きらきら」していると思うもの。

ホロヴィ 何というか、「それでもこの世は美しい」「それでも人生は美しい」というような……。

クララ そうなの。肯定的な気持ちになるわ。そして、衿子さんの随筆は次のように続きます。「……人のいなくなった九月の山村の、透明な光の粒子をあびていると、モーツァルトばかりが身近になっていった」。光を感じると、モーツァルトが聞こえてくるというか、光の中でモーツァルトを感じるというか……。

ホロヴィ 「光」か。ベートーヴェンはソナタ「ハンマークラヴィーア」のスケッチ帳に書いているよ。

「汝不変なるもの わが魂の喜びたれ わが巖、わが光 永遠なるわが心のやすらぎたれ」

クララ ベートーヴェンは、モーツァルトを敬愛していたよね。「ヘンデル、バッハ、グルック、モーツァルト、ハイドンの肖像画がわたしの部屋にある。」

ホロヴィ 憧れの先輩作曲家の肖像画を部屋に貼っていた。あるあるだなあ。なんだか、ベートーヴェンを人らしく感じさせるね。親近感がわくよ。

クララ あら、私がベートーヴェンに親近感を持った大好きな彼のメモは、これよ。「毎日五時半から朝食まで勉強すること！」

ホロヴィ まさしく「決意表明」だ！

【引用書】岸田衿子「草色の切符を買って」青土社 1987

小松雄一郎訳・編「ベートーヴェン 音楽ノート」(株岩波書店 1957)